

# 東北公益文科大学

## 総合研究論集

# 17

白話か文言か…日本古典詩歌の中国語訳について（その二）

——周作人の場合——

呉  
衛  
峰

# 白話か文言か：日本古典詩歌の中国語訳について（その二）

## ——周作人の場合

呉 衛峰

### はじめに

この数十年來行われてきた和歌・俳句など、いわゆる日本の和文学系の詩歌の中国語訳は、ほとんどは文語（文言）体である。1980年前後の議論が一つの流れを作ったように思うが、文革以前の翻訳、さらに溯って、民国期における和歌・俳句の翻訳を検証すれば、かならずしも文語一辺倒ではないことが分かる。口語（白話）と文語（文言）の両端に位置するのは、周作人と錢稻孫の訳といっても過言ではないので、両者の翻訳の比較を通じて、日本の古典詩歌（和文学）の中国語訳の文体選択に含まれている問題について考えるつもりであるが、この度の研究ノートは、とりあえず周作人の翻訳と翻訳観を通じて、口語訳側の言い分を確認したい。

## 一、周作人の翻訳観

民国期における外国文学の翻訳について、中華人民共和国の建国後とくらべれば、古典文学の翻訳が極端に少ない。日本文学に関してはなおさらのことである。その理由について、1921年の周作人は以下のように述べている。

陳、胡両氏等が古典作品を翻訳することを主張しているのが、確かに理にかなっている。ただ私見では、ただいまの中国では、そのような必要がないと思う。(中略) 人情はどうも復古に傾いているところがあるので、近代の作品を十年間翻訳しても、社会に多少の影響をもたらすことができるとはいえ、一冊の神曲の翻訳が出て、人々に古代に対する羨望の念を抱かせるには遠く及ばない。中国の特殊の状況下(盲従しやすく、古代のものを好み、客観的になれない)、古典の翻訳は後回しにした方が良からう。古典を読んで役に立つ人は、おそらく外国語の翻訳を読めるだろう。しかもただいまの中国では、人材が足りず、近代の翻訳もまだ不足しているのに、どうしてまたそういうことをする余裕があるのだろうか。

(陳胡諸君主張翻譯古典主義的著作，原也很有道理，不過我個人的意見，以為在中國此刻，大可不必。(中略) 因為人心終有點復古，譯近代著作十年，固然可以使社會上略發出影響，但還不及一部《神曲》出來，足以使大多數慕古。在中國特別情形(容易盲從，又最好古，不能客觀)底下，古典東西可以緩譯，看了古典有用的人，大約總可去看一種外國文的譯本。而且中國此刻人手缺乏，連譯點近代的東西還不夠，豈能再分去做那些事情呢?)<sup>1</sup>

大事なのは外国の近代文芸を翻訳して、中国の言語と文芸を改造することだというのは、周作人の当時の本音であろう。謝六逸が1929年に上梓した『日本文学史』においては、このような考え方をさらに明確にしている。

時代は絶えず先へ進んでいる。日本の古代作品に対して、我々はすでに紹介する時間がない。ただし、近代の作品の中には、確かに中国に紹介し、我々の参考に供する価値のあるものが少なからずある。

（時代是駸駸地前進，對於日本古代的作品，我們已沒有餘閒來介紹。但在近代的作品裡，確有許多值得介紹的，可供我們借鏡的地方正多。）<sup>2</sup>

以上の二人は、民国期において、日本古典文学に関して、もっとも多く紹介していたほうであるので、全体の状況も推測できよう。

本題にもどる。周作人は文筆活動を始めたころ、『域外小説集』などの文語訳を世に問うたが、新文化運動に参加し、『新青年』に文章を発表して以来、もっぱら口語文で文章を書くようになった。ここで、彼の詩の翻訳に関する意見を見てみたい。

仏典翻訳の鳩摩羅什が言うには、「翻訳とは、ご飯を噛み碎いてから人に食べさせるようなことだ」という。それは当たっている。本気で良い翻訳を出そうとすれば、翻訳しないに越したことはない。翻訳すると、二つの欠点がある。一つは、その欠点はそもそも翻訳の本質であるが、その一、中国語に訳した以上、原文に及

はない。原文と同じようにしようとするれば、Theokritos に中国語を学んでもらい、中国語で書いてもらうしかなかろう。その二、外国の作品の訳だから、声調の整った読みやすい漢文らしくない。もし漢文と同じようなスタイルなら、きっと自分勝手に書き直したものとなり、本当の翻訳とは言えないだろう。

二、口語体で詩を書くなら、韻を踏んだ五言七言を使う必要がない。呼吸の長短にしたがって文を切ればよい。いま訳している歌は、以上の方法で試みている。これは私のいわゆる「自由詩」である。

### 三、(略)

四、以上は皆ただいまの意見で、もし後により良い方法を思い出せば、または他の人により良い見解があれば、当然それにしたがうべきだろう。

(什法師説、『翻譯如嚼飯哺人』，原是不差。真要譯得好，只有不譯。若譯他時，總有兩件缺點，但我說，這正是翻譯的要素：一、不及原本，因為已經譯成中國話，如果還同原文一樣好，除非請 Theokritos 學了中國語，自己來作。二、不像漢文——有聲調好讀的文章——，因為原是外國著作；如果用漢文一般樣式，那就是我隨意亂改的糊塗文，算不了真翻譯。

二、口語作詩，不能用五七言，也不必定押韻，只要照呼吸的長短作句便好。現在所譯的歌，就用此法，且來試試。這就是我的所謂『自由詩』。

### 三、(略)

四、以上都是此刻的見解，倘若日後想出更好的方法，或有人別有高見的時候，便自然從更好的走。<sup>3</sup>

以上は周作人の初期の翻譯論である。當時は魯迅と同じく「硬訳」を主張していたので、かなりの批判を受けたが、次

節でかかげる周作人の翻訳からも分かるように、彼の翻訳は基本的に平明なもので、魯迅が訳したロシア小説に見られるような判読不可能な文章はなかった。

円熟期に入ってから、彼は自分の翻訳観に多少の修正を加えながらも、基本的な方針を堅持していた。

原書のために翻訳するのなら、信（原文に忠実）・達（読者に理解してもらえ）がもっとも重要である。そうすると、口語文が一番良い。大変骨が折れるが、なんとか原文の意味をつたえることができよう。ただ雅（文章の美しさ）がどうしても足りないようである。私に言わせると、口語文にもそれなりの雅が存在するが、世間一般で言われている雅とは異なるので、それは雅と認められず、低俗と考えられている。（中略）

（文語）の翻訳は頗る難しそうに見えるが、実際そうではない。個人的な経験では、口語体よりずっと簡単である。少なくとも、簡単にこまかせるのである。それほど骨を折らなくてももっともらしい文章が書ける上、原文の意味も大体伝えられるので、自分は満足し、読者も愛読しないはずがない。これは翻訳の近道であり、苦勞せず大きな成果が得られる。苦勞して成果の少ない口語訳とは同じレベルでコメントできない。

（假如真是為書而翻譯，則信達最為重要，自然最好用白話文，可以委曲也很辛苦的傳達本來的一位，只是似乎總缺少雅，雖然據我說來白話文也自有雅，不過與世俗一般所說不大同，所以平常不把他當作雅看，而反以為是俗。（中略）

（文言）譯法似乎頗難而實在並不甚難，以我自己的經驗說，要比用白話文還容易得多，至少是容易混得過去，不十分費力而文章可以寫得像樣，原意也並不怎麼失掉，自己覺得滿足，讀者見了也不會不加以賞識的。這可以說是翻譯的成功捷徑，差不多是事半功倍，與事倍功半的白話文翻譯不可同年而語。）<sup>4</sup>

以上の議論はおそらく小説などの散文体の翻訳について行われたものだろうが、詩歌の翻訳にも当てはまると思う。次の議論は詩についてのものである。

私は詩が書けない。ここで韻文の話になったのは、前文で文語の翻訳に言及していたので、そのついでに文語で詩を訳すという問題について一言いいたい。自己矛盾しているようだが、私は外国の詩を中国の漢詩に訳す能力のある人には反対しないのである。しかし自分が本のなかで詩にぶつかると、散文で訳すことを主張する。行を分けても分けなくても、散文で訳す。なぜかという、私は現在、韻を踏む口語体の詩のスタイルがないから、韻文で訳せないという考えを持っている。(中略)古い文体は利用可能としても、新しい時代は自分の新しい道を見つけないければならない。目下、文語の漢詩文で翻訳する人はおそらくいないだろうが、新しい道もいまだに見つかっていない。散文のほうでは何とか数十キロ前進しようだが、韻文のほうではまるで手がかりがない。これは探求する価値のある仕事である。私のような素人は何も言えることがないが。

(我不會得做詩，這裡說起韻文，乃是上文講到文言譯書，所以連帶引起來，想對於用古文譯詩的問題說一句話。看來很像是矛盾，我對於有有能力的人把外國詩歌譯成中國舊詩並不反對，但是自己如遇見書中有詩歌出現，卻主張用散文譯，無論是連寫或者分行，總之都是散文，因為我覺得現在還沒有有韻的白話這一體，所以沒法於用韻文譯。(中略)舊文體縱或可以應用，新時代應當自己去找出途徑來。現今想用古詩文各體裁譯著的人大概是沒有了，但是新的途徑也還沒有找好，散文方面總算走了幾十里路，韻文卻沒有什麼頭緒，這是值得去試探尋找的，雖然在我外行人這裡毫無意見可以貢獻。)<sup>5</sup>

文語で外国の詩歌を翻訳することに反対しないと表明しながらも、行間からやはり、口語で訳すべきだという主張は揺れていないと伺える。ただし、どうして韻を踏む口語詩のスタイルが存在しないと云ったのかは不明である。当時の口語詩に対して不満だったかもしれないが、それでも文語でよいとは言わず、引き続き口語詩の解決方法を見つけるべきだと主張しているように理解できよう。ついでに、「自己矛盾しているようだが、私は外国の詩を中国の漢詩に訳す能力のある人には反対しないのである」と書いているのが、周作人の友人で漢詩調で万葉集を翻訳していた銭稻孫への気遣いかもしれない。

## 二、周作人の和歌・俳句等の翻訳

以上、周作人の翻訳観を見てきた。つぎに、彼による日本古典詩歌（和文学）の翻訳を見たい。

周作人は独立した和歌や俳句などの翻訳がなく、日本文学を紹介したエッセイや、日本古代の物語などにある韻文がほとんどである。近代の『石川啄木詩歌集』は彼が翻訳した唯一の詩歌集である。

『古事記』の中国語訳には、日本の古代歌謡が見られる。八千矛神（即ち大国主命）が沼河姫（沼河比売）に求愛したときの唱和が如何に訳されているのかを見てみよう。沼河姫の返歌の一部のみを掲げる。

青山上太陽隱藏下去了

青山に 日が隠らば

漆黒の夜就來了。

ぬばたまの 夜は出でなむ

像朝陽似的笑著來到這裡

朝日の 笑み栄え来て



雪白的你的雙腕，

栲綱の 白き腕

將抱著柔雪的酥胸，

沫雪の 若やる胸を そ叩き

互相擁抱著，

叩き愛がり

枕著雙雙的玉手，

真玉手 玉手差し枕き

伸長著腿安睡罷。

股長に 寝は寝さむを

不要那樣的著急罷，

あやに な恋ひ聞こし

八千矛尊神啊！

八千矛の 神の命

這事情就是這樣的傳說罷。

事の 語り言も 此をば<sup>6</sup>

非常に平明な訳で、韻を踏んでいない。周作人自身が言っているように、「分行」、つまり改行して詩の形にしつらえて  
いる。

和歌と俳句の翻訳は、「日本的詩歌」、「日本之俳句」などのエッセイに見られる。「日本的詩歌」の中で、周作人はま  
ず、

およそ詩というものは、翻訳しにくいに決まっている。日本のものはなおさらである。もし五言二句または七言一  
句に訳してしまえば、「ご飯を噛み砕いてから人に食べさせる」という鳩摩羅什の言葉の通りになるだろう。散文  
で説明的に訳すのも、レイシの汁を絞り出して飲むようなことで、味がすでに変わっている。しかしこれ以外方法  
がないから、本文で引用するものは、今のところ、この方法で解釈せざるをえない。

(凡是詩歌，皆不易譯，日本的尤甚。如將他譯成兩句五言或一句七言，固然如鳩摩羅什說同嚼飯哺人一樣，就是只用散文說明大意，也正如將荔枝榨了汁喫，香味已變，但此外別無適當的方法，所以我們引用的歌，只能暫用此法解釋了。) 7

周作人はこの文章で確かに歌と俳句を散文の形で訳出したのである。和泉式部の「もの思へば沢のはたるもわが身よりあくがりに出づるたまかとぞ見る」を、

心裡懷念著人，見了澤上的螢火也疑是從自己身體裡出來的夢遊的魂。 8

『古事記』の歌謡の訳に見られる改行も見られず、そのまま散文的に中国語でパラフレーズしている。芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水のをと」も同じく改行せず、

古池呀，——青蛙跳入水裡的聲音。 9

としたが、切れ字の「や」に当たる「呀」と、ハイフンで、俳句の詩的メカニズムを映す工夫をしている。また、一茶の句「瘦蛙まけるな一茶是に有り」を、

瘦蛤蟆，不要敗退，一茶在這裡！ 10

と、やはり口語体に訳している。

周作人は歌、とくに俳句と川柳の独特の美学に、深い理解を示しているが、それゆえか、翻訳の難しさも熟知しており、あえて原文を犠牲にせず、「翻訳」というより、解釈・説明に近い訳しかたを選択した。翻訳を諦めているように見られるが、わたしが思うには、彼は文語の漢詩調の美しさに匹敵する中国語の新しい口語詩に期待していただけないか。

晩年の周作人は、ほとんどの時間をギリシア文学と日本文学の翻訳についやした。その仕事の中には、石川啄木の歌集と『平家物語』がある。前者は近代のものだからここでは割愛するが、『平家物語』の冒頭部の訳を見よう。

祇園精舎の鐘の声、

諸行無常の響きあり。

娑羅双樹の花の色、

盛者必衰の理をあらはす。

奢れる人も久しからず、

唯春の世の夢のごとし。

たけき者も遂にはほろびぬ、

偏に風の前の塵に同じ。

祇園精舎の鐘聲、有諸行無常的聲響、

娑羅花樹の雙色、顯盛者必衰的道理。

驕奢者不長久、只如春夜的一夢、

原詩は和漢混淆体であり、漢詩のように対句で書かれているが、周作人は依然としてそれを文語の漢詩調に訳さず、口語体で訳している。

## おわりに

以上、周作人の日本古典詩歌の翻訳と彼の翻訳観を検証した。周作人は、詩は翻訳不可能であるという立場から出発して、散文に近い、平明な訳をおこなっていたのである。彼はいつも、自分は詩がわからないと謙遜していたが、事実上はともかく、外国の古典詩歌を安易に古典中国語に訳し、読者にあたかも中国の古詩を読んでいるように受け取らせることには反対しているのが明らかである。そして、新文化運動以降、文語（漢文・漢詩）調で翻訳しないというのも彼の一貫したポリシーであろう。

周訳の良い面は、読者に外国の詩歌の異文化としての本質を忘れさせないことで、異文化を体験させようという立場から翻訳していた。訳詩・訳歌のみを取り上げて言うと、詩の言葉としての魅力がいささか不足しているところが遺憾な点である。

ただし、周作人の翻訳観および、彼の口語訳の実践から分かるように、日本の古典詩歌にとって、より理想的な翻訳形式が如何なるものかを模索しつづけていたことは確かである。

- 1 「翻譯文學書的討論」、1921年2月刊『小説月報』12卷2号。鐘叔河編『周作人文類編⑧ 希臘之餘光』（湖南文藝出版社、1998年9月）、七〇三〜七〇九頁。本ノートにおける日本語訳はすべて筆者によるものである。
- 2 『日本文学史』「序」、上海：北新書店、1929年。
- 3 「古詩今譯」Apologia（題記）」、1918年2月刊『新青年』4卷2号。『周作人文類編⑧ 希臘之餘光』、二〇六〜二〇七頁。
- 4 「談翻譯」、『苦口甘言』、1944年11月。同前書、六八五〜六八六頁。
- 5 「翻譯四題」、1951年6月刊『翻譯通報』2卷6期。同前書、八〇六〜八〇七頁。
- 6 中国語訳は『古事記』（中国對外翻譯出版社、2001年1月）による。日本語原文は筆者が追加したものであり、新編日本古典文学全集による。
- 7 「日本の詩歌」、1921年5月刊『小説月報』12卷5号、鐘叔河編『周作人文類編⑦ 日本管窺』（湖南文藝出版社、1998年9月）、二五三頁。
- 8 同上、二五四頁。日本語原文は新日本古典文学大系『後拾遺集』による。
- 9 同上、二五八頁。日本語原文は新日本古典文学大系『芭蕉七部集』による。
- 10 同上、二五九頁。日本語原文は、日本古典文学大系『蕪村集 一茶集』による、三三二頁。
- 11 北京：中国對外翻譯出版公司（2001年1月）、三頁。日本語原文は新日本古典文学大系によるが、改行は筆者が行ったものである。